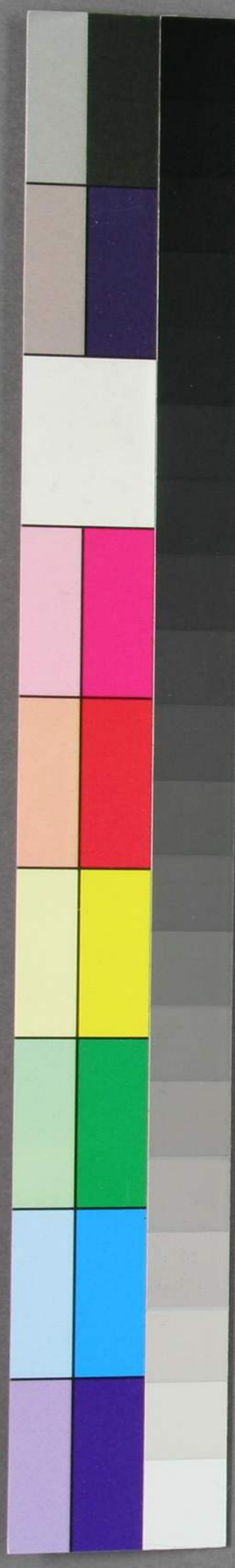


香合傳叢揮

香合傳  
十五冊之内

多  
1938  
19



門多  
號 1338  
卷 13

名香合之式發揮



名香と合する事ハ縉紳貴人候



吾輩山林の士の事ハ何れハ吾輩此式を催さん  
と多しハ此つもの正格香合を所有すまかて  
合を争むるの好士も亦一時の興から武  
とてて真の好むるものも亦亦好文の興書も  
又も亦亦山林の士の合も應し

華美と水がく素雅と主と 樂しむへ支ことよ  
らそ名香合といつて泥と名香をてい此式ハ不  
用なりおれ一より膠柱の具とてなり

一傳云宝礼らふ

宝禮といひかりの車なり

一傳云厨子云々

厨子の製法 予未其器と云ハ又其寸尺制度  
と諸人せん追て可考厨子ハ限何架カとて

一傳云料紙ニツヨ折云々 論外其半 眞と云々

一傳云短冊と用ツ方ツ短冊の半眞と云々

短冊と用ツ方ツ短冊の半眞と云々

一傳云けやの火と云

火取箸の半ハスえんハ不用とスえんハ火取箸

ハセと云ル灰ハセと云ル但用いてル若し云

一傳云香爐の火拈糸して灰をへらさる云

火取香爐の火拈糸して灰をへらさる 柱合

式の通り之但亂氣ハ横刃の有大中ハ香爐火若  
取出灰とつくるなり

一傳云持系の香と前後よりちまきへ云

うちまきへて之初ニ炷出まきを一右と定ぬ次ニ  
炷出まきと一右と定む番々如此ハ車大枝流芳  
儀なる番合の式ニ准せ聞祭式ニこれ知ら  
然るに次の巻の記録ニ初聊疑有後例ハ祭明キ  
一傳云まきやじりトきてまきへて云

この向讀意と着てるなり記なるまきよまき  
じりトきてまきとのつつけえれい燵合のこまき  
ちまき限入ノ次亦ハ炷出まきまきとせれ  
ハ式ハ柱合との格おるれハまきハ炷出まき  
なり又まきやじりト向とまきハまきやじり  
とせらるるなりまきやじりハ炷出らるるなり  
火著  
まきやじりト用たれハなり然るにこまきやじ  
と向とまきやじりトきてまきやじりト

より後キヤウジの香着のく用はれはかり、くらくとつらぬ  
誤るなり、さて右の方を置ると香爐の右の方を  
上を置るとされ、煙合式をくくると香着火着もた  
る、まは置半なり、たよとくくくくをくくくく  
盆のくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
もあつたり、殊に香着をくくくくくくくくくくく  
不便なり、因て三つは法に拘り、盆の右の方を  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

一傳ふ判の詞の半はふ

東殿六番  
御香合三  
判詞准台  
後日書之  
とんえう

少狭い後日、認めたるより、其席を認め時  
の列を退座も、至るなり、跋に勿論なり、は  
可有ともえたり

一傳ふ札を用はるといふ説有之、不且之

少狭いさしあつたり、く札折居をくくくく  
とくあまひは組香をくくくくくくくくくくく  
古式より、くくくくくくくくくくくくくくく

ての世も人此外香會の...  
とてわづらひと大枝流芳といへり  
紙指地敷紙の敷皆此香の具といへり  
瓶中の不救多き...  
の玩物めき...  
文明十一年の志山叙清香合  
又燧合等の式法器具とス  
或ハ歌合  
連歌より器具ハ  
燧瓶 香盒

東鑑合  
燧合  
燧合

着火器 薰爐 香盆  
料紙筆硯 文臺短冊  
士君子の玩ぶるもの古式

六番脚香合  
殊に其夏筒  
古式法  
優美なるもの

東山泉叙御香合  
志野宗信宅香合  
文明十一年五月十二日判衆議  
近衛准后房嗣公法名大通  
文應元年五月九日判衆議十番  
判者牡丹夢菴小月柳

文墨餘事以玩香為樂者祖述憲章此  
二式及炷合式之類而可時以出新奇  
也何以瑣々組香諾式乎 墨香生誌



予於組香中特所推獎者鴨祐為之礎  
城島香一事耳予亦擴之以肇教式  
如其作法亦有所據也

*(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)*

附亂箱置合之考



傳云亂箱の内前ノ香櫃を合しノ灰ニ炷草入  
銀葉包あり今銀葉入之箱可用之

此並合炷合式長盃四方盒等の置合より異なり  
然るに前よりソム灰より了のくくありあき大  
略して記したるはきく了のくく抑供香存香共  
下鑪瓶盒の三物の並合ハ一定の法則ありて  
長盃亂箱等ハ此より法則と出ずなり

供香ハ、用多クハ、古未ク香の至合ニ  
 二極あり、其一ツハ中香爐、右寫瓶、左香盒  
炷空入銀葉入本香盒多ク炷空入  
ハ磁器と用銀葉入ハ漆盒と用 是ハ一法ニ次  
 左香爐、中香合、右寫瓶の至合あり、長盃亂氣  
 共ニ此二ツの至合と云フ半々、香の条の湯の  
 度香の至合ハ此二ツ多ク、これハ重香合と用  
 了故   如此中通了、一玉ハ多ク東殿  
 御飾書の図もかくの通り、又炷合式、長盃の

至合ハ、次ハ、置合の法、四角盃 炷空入、銀葉入と  
 前ト向ト割テ至合セ、格別多ク 如此  
 又此亂氣の置合ハ、最初ハ、置合の法、不詳  
 前ト香爐、香炉の前の 前トあり、真中の前ト  
 香爐、右の方ト、香炉の前の 前トあり、乱氣の中通了 左の方ト  
 炷空入、乱氣の中通了 同極ト置合セ、乱氣の中通了 銀葉入ハ  
 向ト多ク、此式ト、銀葉包多ク 銀葉包多ク、盃瓶 盃瓶  
 盒の三物ト異あり、向ト至合、今ハ 今ハ



銀葉入の盒と用ふなり  かくのこころ 組香なる  
亂れ置合れ此意とて置合せとの事 思ふなり  
故に此式の傳の奥にも万葉ハ存香の飾  とも  
分きなりと見えたり

因に又千家未飾といふ圖の中



かくのこころの圖なり  臺上の様  水指

の飾と暮  たるものなり 兎  角産香ハ  
前  二所の至合  分きとの歎

予曩偶見題志野宗信家名香合一本於骨  
董店是香家者流深祕之書遂乞借騰写藏  
之久矣今竊乞某氏所藏之善本以校合焉  
参閱之次摘其不了者數条論定之以爲  
小冊副置原本云

墨香生

...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

古今文苑記

...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

香合式略記

一上座の人より次方より座及び入本棚飾お見よ  
座より着束例のこと  
一香本より座敷の口を控として座敷より出飾  
ある香盆を下して棚のおよむ退  
一上座の人より次方より座及び入本棚飾お見よ  
座より着束例のこと

よ着

一香本座敷へ出香包と蓋を入蓋と棚の天井の上  
至炭箱引勝手へ入

一香本又出て文臺と取執筆を進へ堂硯を上座  
より人へ進め火取引勝手へ入

但此時執筆ハ文臺を取亦左の方横置のそ中  
より上座の人へ堂硯を亦右の縁の向服より寄る

一香本火取枵座敷の口より勝手より座敷へ出座  
着火取をおよ至灰子あより取

一上座の人短冊一枚を堂硯一面をこれ次へ廻す

他執筆香本まゝの廻す 短冊の折るまゝ  
硯の左のまゝ

一銘と硯を前より出し置をとり茶を添へ硯を膝  
の向服定座より短冊取上法のてゝ 裏は名を  
きくむ

もの如く三ツ折初の字を 香本の初香の香柱出まで  
置をとり茶を添へ短冊取

一香本浪系入を乱茶を入席中は會杯より時各  
出座 一香元ル出座  
はらり

一香柱出て格より一番の厄右少早短冊取上たすなり

少の左の点とくけ右まふれ、右の点とくけ左右甲乙  
少き持とせ番とぬ此

一香不残柱早香本短冊の点と拭仕廻り時上座  
一人より短冊硯と次舟のまじり執事より了ん

但香本も短冊硯を執事のあまおやりり

一執事香本の短冊硯も一羽の重りて横置の左  
久直臺よりありて也 短冊の臺硯の上の臺あり

一香本居前と申し香煙を乱箱に入浪を仕廻

柱空入を拵席中より一羽のり付各本を復す

一執事文直臺を前より出し硯のつとと取文直臺の腹

右の方より臺をすりすりすりとあて文直臺の右硯  
のつと、の左よりありし料紙と例のつとと取て殊の紙の

硯のつとの上より水引と其上より料紙と文直臺の  
上より臺ね短冊の次舟と改料紙の左より、の臺及び各

法の如く浴の例を記し終り短冊の臺硯の上より  
但香元の柱空入を持廻りて棚の正面より向柱空

入乱箱より入香煙出炭固を除灰多し等如  
例しく香煙を乱箱より入回して本座より出た香煙  
の少と記述を待たす

一執事香本より一番の灰石の絡出香の各と尋  
香本執事より告て記さしむ順に如此

一執事記録簿より水引より綴りより折硯の各の  
上より料紙の上より筆と硯より筆を向より  
為し記録料紙共文臺の上より筆硯の蓋

として文臺の上より初のものより蓋文臺を取  
横置の真中初のものよりつけ蓋記録を執  
判者の前より出に

一判者時立より判の詞の後日可認より一座より後より  
より記録を見次より廻り

一執事記録と文臺の料紙より筆の蓋文臺と前より出  
より向へ突出に蓋

一香本文臺と持本の軸根元初より飾重硯と概

香本文臺と持本の  
其後重硯と出に

執事の上をのりより香本  
より甲香本より執事へ回す

一の左の方立初の所は座

一香本香盆取下して香包打交棚のふか下退

一上座より立て一人宛香包を取退

一香本より人炭箱拵出初りし棚下飾盆は残置

香包と取盆と棚の天井より上座退次の間より

扱禱 香合式早

附 歌合前議判

一穩座より洛と探得る香洛を題する歌が必ず

一洛より出耳揃う時香合の通は席に着 各々短冊  
懐中巾

但上座より人判者より必ず執事より香合の座より

着末座より必ず主へ

一末座の人又且座と云執筆より進め重硯と上座より

人より進む

一上座より人草葉の短冊一枚より重硯一面を云

へ廻す

但重硯の末をまきまてより執筆の文臺の硯と  
用之草葉の短冊をくろ末をより執筆へ廻すなり

一執筆硯の蓋とん文臺の硯右の方より墨をとり  
筆を濡して文臺の右硯の蓋の灰より懐中の短冊  
と出 短冊 名は不書法と

但上をより末をまきまて一同右のこ

一殆ど短冊短冊三つ折上をより次をより持出て

執筆のつた

一執筆短冊と文臺打交て文臺の灰の方より料紙  
と硯の蓋の上より取文臺の上より例のこく取て  
砂の紙の硯の蓋の上より水引と其上より  
料紙と文臺の上より短冊と一枚つ披き記録  
認り

但料紙一枚より二番の灰右より認り半香合の  
記録の如く歌二行より認り



一 執筆先ツ一番の左右の歌謔早左の歌二遍右の  
 歌二遍花披溝 む左右二返宛の披溝所てり一を内  
より尋返も人何の年遍ても披溝も年  
 一 殆ど一番の左右少平同題よ何くそくしるも歌の格  
 調てよはのりあ難の有魚号委しく考合てたす  
 出ると思ふたの下のけ 短冊の番合の  
草葉とて併用 右すくぬ右  
 の下とくくた右甲しすきは左右の文字の上の括  
 書 考合の草葉とすすぬぬ  
いふの上の書あり 番、加付  
 一 記録謔早草葉出来括る時上庄の人より草葉硯

を次才より重ぬ末座の人よりた

一 末座の人重硯とまの我たの方横書の上真中よ  
 草葉と執筆よりた

一 執筆記録と文真の上よ草葉の次才と改  
 料紙の左の方よ見合殆どの少を紙一番の  
 左より次才よ題を讀て殆どの名と字の歌の  
 下よ記し水引を綴ニツよ折硯の蓋の上よある  
 料紙の上よ草葉と硯よあまの墨を向よりた

記録料紙硯等香合の通文臺の上よ並記録を  
 持判者の前よ並退短冊草葉共上依  
文臺の上よ並てり  
 一判者時直し随ひ判の詞の後日て認り一を披ふ  
 一と記録取見次と廻を半香合の式のと  
 一執筆記録と文臺の料紙の上よ並り文臺をかへ  
 実出並  
 一末座之人文臺と持糸の軸眼言ふの飾重硯を  
 文臺の側よ並り座よ復お経 歌合式并

香合式寶禮畧記

掛物

文臺

料紙硯

軸眼へ寄飾

厨子

用歌書棚

錐子入置

天井

香盆

亂のれ香爐

火箸

中段

炭箱

香筋立

火箸

下段

亂箱

柱室入

銀葉入

宣硯

三折短籍人教程

文鎮壓之 或以水滴小而雅者代之

厨子のりの方よ  
 但畧スレハ 銘し仰硯持參其時ハ 盆ニ水入短籍ヲ置  
 宣硯ノ外ニ飾ル

水引載置

短冊 雲形ヲ用

亂箱の丸のかき

火取

香包人々配當

<sup>紅白</sup>水引記録ヲ綴

短冊書法

一 右丸	二 右丸
三 右丸	四 右丸
五 右丸	六 右丸
七 右丸	八 右丸
九 右丸	十 右丸
持	

一番		一番		香合記
左	右	左	右	
何	何	何	何	
誰	誰	誰	誰	
誰	誰	誰	誰	

折返端々書

